

# 水辺の環境



## コノハズク

フクロウ目フクロウ科 *Otus scops* 木葉木菟

コノハズクは、ユーラシア大陸南、アフリカ、インドなどに広く分布しており、日本へは通常夏鳥として渡来し繁殖します。平地から山地にかけての様々な樹林に生息し、主に樹洞を利用して6月頃に4~5個の卵を産みます。

日本のフクロウの仲間の中では最も小さく、体長は20~25cm程度で、体色は褐色型と赤色型の2型が見られます。日中は木の枝上や樹冠内などの暗いところでジッとしていますが、人が近づいたりすると、頭にある羽角と呼ばれる羽を立てて警戒し、体を細くしたり、細目を開けて様子をうかがったりします。夕方から夜間にかけて活動し、主に昆虫類を主食としています。

繁殖期には主に夜になると「ブツ、キョッ、コー」と高く澄んだ声で繰り返して鳴きます。これを「仏法僧」と聞きなしますが、既に種として「ブッポウソウ(ブッポウソウ科)」が存在するので、本種を「声のブッポウソウ」と呼ぶこともあります。個体によっては、最初の「ブツ」を出さないものも見られます。

なお、コノハズクに近い種であり、沖縄とその周辺の島々に生息するリュウキュウコノハズクは、このような特徴的な鳴き声ではありません。

コノハズクは、世界的に見ても個体数が減少しており、国内でも営巣環境の悪化からその個体数の減少が懸念されています。現在、環境省のレッドリストには指定されていませんが、多くの都府県で絶滅危惧I類~準絶滅危惧種<sup>※1</sup>に指定されています。また、本種を含むフクロウ目は、ワシントン条約付属書II<sup>※2</sup>にも掲載されており、国際的な取引には規制がかけられています。

※1 レッドデータブック統一カテゴリ相当

※2 絶滅のおそれがあり保護が必要と考えられる野生動植物を、付属書I、II、IIIの3つの分類に区分し、付属書に掲載された種について、それぞれの必要性に応じて国際取引の規制を行うこととしています。付属書IIは、現在は必ずしも絶滅のおそれはないが、取引を規制しなければ絶滅のおそれのあるものが掲載されています。

### 参考文献

- ・山溪カラー名鑑「日本の野鳥」 浜口哲一ほか 山と溪谷社 1985年
- ・「近畿地区・鳥類レッドデータブックー絶滅危惧種判定システムの開発」 監修 山岸哲 編著 江崎保男、和田岳 京都大学学術出版会 2002年
- ・山溪ハンディ図鑑7「日本の野鳥」 叶内拓也ほか 山と溪谷社 1998年
- ・「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」 中村登流 中村雅彦 保育社 1995年
- ・環境省生物多様性情報システムホームページ
- ・外務省ホームページ
- ・経済産業省ホームページ